

ジャージ姿で坊主頭の少年たち、制服姿の職員たちが、呆然とテレビを見つめている。

テレビからは、『日本海側のある地域』を襲った地震と大津波に関する緊急ニュースが流れていて。(※この映画の中における『震災』はあくまで架空の事態であり、故にこういったニュース素材に関しても新たに状況を設定しての創作である。さらに、今回のシナリオ上に『テレビ報道』が表記された場合、それは視覚的なものではなく音声のみの表現となる)

誰一人口を開くものはいない。皆が固まったようにじっと画面から目を離せない。

ひとり、その場を離れる少年、内田圭(19)。

圭が走つてくると、机に向かっていた職員に声をかける。

職員「廊下は走るなよ」

圭「すみません。電話、かけたんですけど」

職員「外部との連絡は許可されてないって知ってるだろ」

圭「津波のところに知り合いが…姉ちゃんがいるんで」

バタバタと足音を立てて別の職員が走ってくる。

職員「…津波？」

別の職員「ニュース」

職員「え？」

別の職員「いや…ニュース…」

同僚を引っ張るようにレクリエーションルームの方に駆け去る。

圭「…」

カウンターの小窓から腕を突っ込むと電話を取り上げ、ダイヤルボタンを押す。

しばらく待つが相手が出ないようで、舌打ちをして

再び番号を押す。
レクリエーションルームの方から騒ぐ声が聞こえ始める。

数人の教職員がテレビを見つめている。流れている緊急ニュースに、ある者は携帯電話を手にし、ある者は隣の者に語りかけ：「ざわざわと反応していて。」

ひとり、じっとテレビ画面から目を逸らさずにいる男、柳田周⁽⁶³⁾。

緊急ニュースが、津波による原発の破砕事故について告げ始める。

周囲のざわめきが大きくなる中、画面を凝視し続ける柳田。

全身ずぶ濡れで着衣も乱れている若い女が、小さな女の子を両手で固く抱きかかえ立ち尽くしている。大気の咆哮のような、或いは巨大なものが地を這いまわるような音が周囲を包んでいて。

今まさに長い距離を全力疾走してきたかのように女の呼吸は激しく、ただ茫然と目を見開いている。

足元が揺れる。子どもをさらに固く抱き、身体を支えるように目の前の手摺りに掴まる。

軽快な音楽が鳴る。それは、女のポケットに入っていた携帯電話の着信音：女Ⅱ各務いつか(21)が震える手で濡れた携帯を取り出す。揺れが止む。

割れて汚れた液晶ディスプレイに、見覚えのない着信表示が点滅している。

いつか「…」

携帯から周囲へと目をやり、そして空を見上げる。

着信音が途切れる。

いつかが、迸り出る叫びを抑えるように自分の手首を口に当て激しく噛む。滲む血。洩れる嗚咽。

カメラ引くと、そこは、『震災』から数か月後の「現在」の街、一角の道路に架かった横断陸橋。

何事もなかったかのように道には車が走り、人が行き交う。しかし周囲には大気の咆哮が変わらず聞こえていて。

大きな、嘘のような虹が空にかかっている。

広いアトリエのような教室。授業中。柳田ゼミの学生、十数人がそれぞれにオブジェ制作をしている。制作は発表前の仕上げ段階であり、喋る者はいない。柳田がその間を歩きながら短い批評を加えていく。

他の学生に対する批評を冷やかな笑みを浮かべて聞きながら自分の制作に向かっている、村上桜(20)。その表情を見つめ、桜に近づいていく柳田。顔を上げ柳田を見る桜。

桜 「タイトルを『愛』にします」

柳田「…」

柳田が桜のオブジェを手に取り、そのまま床に落とす。砕け散るオブジェ。

桜 「…」

教室中が息を詰める。

柳田、表情を変えずに教室を出て行く。

その後ろ姿を凝視めたまま動かない桜。

誰も桜に近づこうとしない。

沈黙の中、一人が「帰ろーつと」という声を上げ、みんなが笑う。緊張した空気が緩み、帰り支度を始める学生たち。

学生A「柳田さんクビになるって噂聞いたけど」

学生B「マジ？」

学生C「最近すごい休講多くない？　なんか具合悪そうだし」

学生D「クビはないって。柳田周ついたらやっぱアーティストとして

は有名じゃん。久しぶりに来月東京で個展やるし。大学の看板だろ……」

桜「今の柳田周にそんなバリユーがあるのかな」

学生たちが再び沈黙する。

桜「昔の名前なんだよ。いまだき個展なんかやったら笑われて
終わりじゃない」

桜がいらないかのようにその言葉に反応しない学生たち。それぞれに私物を持って部屋を出て行く。

ひとり残る桜。背筋を伸ばし……再び笑みを浮かべ。

人目につかない一角、道に面した路地の角に身を潜めるように立っている佐伯朝雄(19)と森優樹(19)。

寒い時期なのに二人は薄手の作業服しか着ていない。

通りかかる若者二人にいきなり襲いかかる朝雄と優樹、そのまま路地の裏手の空間に連れ込む。

固まる若者二人。その背後を塞ぐように、同じ作業服姿の圭が現れる。

圭と朝雄は坊主頭、優樹は中途半端なスポーツ刈り。

朝雄「(にこにこ笑いながら若者たちに)びっくりした？」

若者A「:(びくつきながら首をカクカクと上下に)」

朝雄「つか実はね、ボクら漫才やってるんで、ちょっとそれ見て

欲しいんですよ。時間とか大丈夫？」

若者A「:(さつきと同様にカクカクと首を上下に)」

朝雄「(優樹と目を見合わせ):」

朝雄と優樹で漫才を始める。ネタも面白く二人の息もピッタリで、若者たちの表情があつという間に緩み、笑いが弾ける。

走る電車

才子で締めた瞬間拍手喝采の若者たち…に飛び掛かる朝雄、優樹、圭。若者たちを叩きのめして携帯と財布を取り上げ、服を剥ぎ取って着替えていく。すぐに奪った携帯に番号を打ち込んでいく朝雄と圭。

朝雄「…あ、久保田くんつか、朝雄です…あ、いやちよつと早めに出てきちゃったんすけどお…」

圭の電話は、相手が出ないようだ。

奪った服が足りず、優樹だけは、やや薄着のまま。

元の道に帰っていく三人と入れ替わるように脇の建物の裏口からエプロン姿の若い女が出てきて煙草に火をつける。その女は、いつか。

やや混んでいる車内。

優先席の前に立つ柳田。そこには学生風の若い男女

が座って寄り添い携帯のゲームなどを楽しんでいる。

柳田「…」

柳田を無視してじゃれ合う二人。

柳田「なんでお前たちみたい人間が生きているんだ」

男の方が目を上げて柳田を見る。

柳田「お前たちなど死んでしまえばいいんだ。正しく生きる人間

にしか生きる資格はない。お前たちにその資格はない。死

ね。今すぐ死んでしまえ」

女が引っ張るようにして二人が席を立つ…「アブナイ

ジジイ…」という女の囁きが聞こえ。

そこに座って目を閉じる柳田。少し、咳き込む。

柳田が店頭で注文の来るのを待っている。

奥から笑顔のいつかが出てきて、弁当を手渡す。

いつか「どうもお待たせしました。毎度ありがとうございます」

黙ったままそれを受け取ると、立ち去る柳田。

いつか「ありがとうございます」

傍らの電話が鳴る。受話器を上げるいつか。

いつか「はい、毎度ありがとうございます。ほかめし亭です…あ、は

い、少々お待ちください。店長、お宅からです」

奥から出てくる店長の佐々木浩介(34)、エプロンを外しポケットから財布や煙草を取り出すと、煙草だけ持って受話器を受け取る。

佐々木「ありがとうございます…もしもし…あ、大丈夫大丈夫…」

裏手に行つて煙草に火をつける佐々木。

作業台の上に置かれたままの佐々木の財布。

いつか「…」

佐々木の財布から千円札を数枚抜き取り、再び仕事を続ける。てきぱきと食材の重い箱を持ち上げ。

弁当の入ったビニール袋を提げ歩く柳田。一軒の家の前で立ち止まり、ポケットから鍵束を取り出す。古ぼけた倉庫のようにも見える建物。
柳田が息をつきながら、いくつもの鍵を開けていく。

大小の機械に囲まれたファクトリー。

入ってくる柳田、ビニール袋をテーブルの上に置くと、湯沸しポットの電源を入れる。

そこは柳田の「アトリエ」なのだろう。個展の準備のために置かれてあるらしい過去の作品や模型、その図面や工具など…。隅には粗末な簡易ベッド。生活用品は最低限のものしかない。心地よい居住空間ではなく、厳しい自己抑制を伴った、表現のための空間。ただ、いくつかの大きな工作機械は、今は使われていない様子はない。

さまざまな本を収めている棚に並んだ過去の個展の
図録や何冊もの『柳田周作品集』。その中には英語
タイトルのものも含まれている。

壁に貼られた、新しい個展のポスター。場所は東京、
日付は1か月後を示している。その脇のカレンダーに
は細々と几帳面な文字で予定が書き込まれていて。
小さな湯沸しポットからお茶を淹れた柳田が咳き
込みながらシンクに近づき唾を吐く。血が滲んでい
る。

歯茎を押す指に付着する、どす黒い血。

なんでもないことのように手近にあった布でそれを拭
き取り、お茶を一口飲むと奥のドアへと向かう。

ドアを開けるとそこには、厚手のビニールで何重もの
壁のようなものが設置されてある。

脇のロッカーから白い防護服とマスクを取り出して身
に着け、ビニールの壁の奥に進む。

そこにある作業台の上に置かれた、奇妙な形のオブ

ジエ。

その前に座り、制作作業を開始する柳田。

防護マスクの中の、苦しげな息遣い。

虎を見ている久保田滾(28)の後ろに朝雄、優樹、圭。

やや離れて大島守(19)や久保田譲(18)がいて。

内海誠司(19)から新しい携帯を渡される朝雄たち。

久保田「働くんだったら斉藤んところに行けよ。電話しといてやる

から」

朝雄「新しい携帯をいじりながら」斉藤クンって今なにしてくん

したっけ」

内海「交通警備の会社。工事とかの脇で車止めたり流したりす

るヤツな。あそこは社宅完備っつーかアパートもあるし」

朝雄「…黙って新しい携帯をいじっていて」

内海「(優樹を指し)そっちのと二人？」

朝雄「(内海を無視して久保田に)つてか、ツルんでるとヤバいし、とりあえず俺一人で」

優樹「(不安げに朝雄を見て)…」

久保田「(優樹の髪形を見て)お前、ひよつとして出所間近とかだつたんじゃないの?」

優樹「…(頷き)まあ」

譲「(バカじゃねえ?)」

朝雄「(圭を指し)こいつは手っ取り早く金が欲しいっつーか」

圭「…」

久保田しばらく圭を見、内海に目配せすると檻の前を離れて歩き出す。内海が圭を伴い、大島や譲も久保田に従って動く。

朝雄「久保田クン」

立ち止まり財布から1万円札を2枚抜いて朝雄に差し出す久保田。

朝雄「(恭しく受取り)前言ってた芸能プロダクションのほうもよろしくです。俺ら漫才で頑張るんで」

久保田、軽く片手を挙げて立ち去る。

朝雄「久保田クン！（去っていく久保田に向かって）あざーす！」

柳田の家

防護服を脱ぎ捨て、奥の作業場から出てくる柳田。

汗、荒い息、激しい疲労感：シンクに近づき嘔吐：口を軽く濯いだ後、少し頭を押さえ：しかしその痛みを振り切るように、脇にあったペンキと刷毛を手にする、奥の部屋へと続くドアに字を描き始める：『OVER THE RAINBOW』…。

描き終えた字を見つめ、そのまま簡易ベッドに倒れ込むように横たわる。

カラオケ屋・個室

いつかがひとりで、ウーロンハイなどを飲みながら歌っている。

間奏の間に傍らのビニール袋に入っていた弁当の包みを開け、中身をつまむ。

袋の中にはもうひとつ弁当が入っていて。

朝雄が、商品を手にした店員と話している。

朝雄「だから予算は2万円だ、つってんじゃない。それじゃ2万にならないじゃん」

店員「申し訳ございません、(別の商品を指し)ではあとこれなんかはいかがでございましょう」

朝雄「それじゃ2万超すだろ。つてか生まれたばっかの子どもにそれムリじゃね」

店員「ですよね、少々お待ちくださいませ」
そこに優樹が入ってくる。

優樹「バイト決めてきた」

朝雄「(店員の動きを追いながら)なんか面倒なこと聞かれなかつた？」

優樹「うんまあ…(笑って)適当なこと言って…」

朝雄「(包装していた別の店員に)ちよつとそれもつと丁寧に包んでくんね。あ、つてかりボンやつぱピンクじゃなくて緑にしとこうかな、男か女かわかんないし。希望的には女なんだけどさ(笑う)緑だと無難だよね。でもない？」

15

未夢のアパート

阿部未夢(19)が小さなテーブルの前に座り、自分で作った質素な食事を食べている。ドアチャイムの音。続いて、声が聞こえる。

朝雄の声「宅配便です」

未夢「…」

立ち上がり、音を立てないように急いでドアに向かっ

て、覗き穴から外を見る。

未夢「…」

脇のキッチンに行き、包丁や果物ナイフなどを取ると別の棚の奥に隠す。

再びドアチャイムが鳴る。

未夢「…はい」

ドアを開けると、朝雄と優樹がいる。

朝雄「女の子！…ピンポン！…って、あれ、違う？ 男か（未

夢を押し退けるように中に入りながら）」

未夢「…かなり早いんじゃない？ 予定より」

金はかかっていないが女の子らしいレイアウト、小ぎれいに片づけられた1DKの部屋。

玩具屋の袋を抱えたまま寝室に向かう朝雄、部屋の中を見回して、

朝雄「…あれ？…（未夢を見る）」

未夢「（キッチンに向かい）お茶とか飲む？」

朝雄「じゃなくて」

優樹も入ってきて、ドアを閉める。

未夢「(優樹に)もしかして脱走？」

優樹「目を逸らし」…」

朝雄「じゃなくて」

未夢「(朝雄に)今からアタシ、バイトなんだ」

朝雄「じゃなくて！」

未夢「ごめん…流産しちゃった」

朝雄「なにそれ」

未夢「だから手紙も、ずっと出せなかった」

朝雄「…そう」

小さなテーブルの脇に座る。

未夢「…」

優樹「…」

朝雄がいきなりテーブルをひっくり返す。そのあたりの物を手当たり次第投げると未夢を引きずり回し

馬乗りになって、手近にあったハサミを突き付ける。

優樹「(入り口に立ったまま)…」

未夢「(目を瞑る)…」

朝雄の力が抜け、ハサミを放り投げる。

優樹がそっと部屋を出て行く。

朝雄「つてゆーか…お前は大丈夫なの？」

未夢「…え？」

朝雄「身体とか大丈夫なの？」

未夢「…」

未夢の眼から涙が溢れてくる。

滅茶滅茶になった部屋の中で、嗚咽する未夢を抱

きかかえ、頭と腹を撫でる朝雄。

朝雄「あ…ちよつと一瞬金貸しといてくんね？」

16

いつかのアパート(夜)

1DKくらいの狭い部屋。生活感がなくやや乱雑に
ものが散らかっていて。

奥の部屋で、いつかと佐々木がセックスしている。激し

く動き、果てる佐々木。

手前の部屋のテーブルの下：小さな女の子Ⅱ遥（5）
がいて、紙にクレヨンで何かを描いている。

奥の部屋からは小さな笑い声や服を着る音が聞こえてくる。

遥の傍らには、いつかが持ち帰った弁当が半分ほど残されていて。遥の口元には食べ物の汚れ。

佐々木が服を着ながらキッチンに向かい、勢いよく手を洗い始める。

奥の部屋から出てくるいつか。

佐々木「手を拭きながら）じゃまた明日。お疲れさん」

いつか「笑って頷き）お疲れ様でした」

一瞬、テーブルの下の遥を覗き込み笑いかける佐々木、反応がないのでそのまま出て行く。

いつか、見送ってドアに鍵をかけると、遥の前にしゃがみ込む。

いつか「死ねよ」

絵を描き続けている遙。

いつかが手を伸ばし遙を殴る。

いつか「死んじゃえよお前」

泣きもせず、いつかを見つめる遙。

さらに殴るいつか。

いつか「…」

立ち上がると椅子に座り、そこに放り出してあったバツグから二つの携帯電話を取り出す。

煙草に火をつけながら、傷だらけでディスプレイ画面も割れている古い携帯のほうの電源を入れ、着信履歴を見る。同じ番号からの履歴が並ぶ。

いつか「…」

テーブルの下で遙が絵を描いている。

水道の蛇口から、ゆっくりと水が漏れ滴っていて。

口元を汚したままの遥がひとり床に座り絵を描いている。傍らに空になった弁当のパッケージ。

周りには、描いた絵が何枚も並べられている。

それらは全て、父親かもしれない男の顔…或いは、父と母と小さな子ども、家族三人の、絵。

水道の蛇口からゆつくりと水が滴り。

遥が立ち上がるとドアに向かう。背伸びするようにして鍵を開け、裸足に小さなサンダルを履いて表に出っていく。

遥が歩く。

そのすぐ脇を、バスが大きなクラクションを立てて通り過ぎていく。

明るい色のポロシャツにエプロンをした未夢が、老人の両手を支え歩行介護をしている。

先輩の介護士が大きな声で老人たちに声をかける。

未夢の先輩「じゃあみなさん、今日も手話歌を歌いますよー」

未夢「(手作りの歌詞カードを胸の前に掲げ)大きな声で一緒に

に歌いましょうねー」

未夢の先輩「はい、いちにの、さん…」

椅子に座っている柳田と2人の外国人美術記者。

一人がインタビューしながらICレコーダーで録音し、

もう一人が時折カメラで柳田を撮る。傍らには柳田の過去の作品が置かれてあり。

周囲では三々五々学生や教員が歩いたりしていて。

記者「(英語)『もの派』から独自の発展を見せた世界的な巨匠、柳田周がどこまで時代をけん引していくのかをアート界が注視していたときに、あなたは突然制作をやめられた。それが今回十二年ぶりの個展を開かれるというのはどういう理由があつたのでしょうか」

柳田「(英語)理由がないといけないのかね」

記者「(英語)…かつての先生の個展には全て、非常に攻撃的で、ある種の犯罪性をも連想させるようなタイトルが必ず設定されていて、その言葉がまた我々を挑発し刺激し、作品を拝見する際に想像力を掻き立てられたということがありました。ただ今回の個展にはそういったタイトル、言葉がつけられていない。何故でしょう」

柳田「…」

離れたところでそれを見つめている桜。

記者「(英語)あの津波以降、すべての言葉は失われてしまった、或いは言葉の持つ力を我々自身が信じられなくなつてしまったという言い方がありませんね」

柳田「(英語)あなたもそうなのか？」

記者「(英語)：あの日以降、日を待たずに先生は今回の個展を企画されたとお聞きしています。あの悲劇から先生が何かをインスパイアされたのだとすれば、やはり個展のテーマはこれまでのような攻撃的なものではなく、全く別のコンテキストになるのではないかという期待が我々の間にもあるのですが」

桜が柳田に向かって歩き出す。

柳田「(英語)期待：？」

記者「(英語)はい」

柳田「(英語)世界は：もうすぐ終わる」

記者「(英語)：恐縮です。どういう意味でしょうか」

近づいてきた桜が柳田の前に立つ。

戸惑う記者たち。

桜「(英語)私の作品を壊した理由を教えてください」

柳田「：…」

桜「私、先生の授業欠席なしなんですけど、やっぱり去年みた

2 2	道	<p>柳田が歩く歩道と路を挟んで反対側の歩道を歩く</p>
2 1	走る電車	<p>いかに落とされるんでしょうか」</p> <p>去ろうとして立ち上がった柳田が、少し咳き込む。</p> <p>口元を拭うときに、口内に滲んだ血が見える。</p> <p>桜 「…血」</p> <p>柳田 「?…」</p> <p>桜 「(柳田の口を指し)血」</p> <p>柳田、口を押さえ少しよろめきながら立ち去る。</p> <p>桜 「…」</p>

桜。ほとんど並ぶように。柳田に視線をやりながら。

23
バー『GOSPEL』

の、エントランスを入っていく柳田。
桜が来ると店を見上げる。

24
同・中

座っている柳田と、白石健彦(63)。

柳田「俺はあとどれくらいだ？」

白石「(笑って)だから俺は医者じゃないって言ってるだろ」

柳田「…」

白石「前に言ってた症状は酷くなってる？」

柳田「(頷く)…」

白石「いま一日どのくらいの時間あれと向き合ってるんだ」

25	<p>同・表</p> <p>柳田「7、8時間」</p> <p>白石「：またウチの研究室で検査してみるか」</p> <p>柳田「その時間をもつたいないだろう。もうちよつとで仕上がる」</p> <p>白石「絶対に完成させろ。お前が死んだら俺が個展の会場でス イツチを入れてやる」</p> <p>柳田「(笑って)：」</p>
26	<p>同・中</p> <p>白石「テロルが惹き起こす結果は大抵自分自身の理想的なイマ ジネーションを裏切っていく。そのことを想像できる者は 結局それを実行しない。だから若者にしかテロはできない。 ：そんなもんじゃないだろ。俺たちの闘いを、俺たちが闘</p>

入ることを逡巡している桜。

う」

柳田「(酒を含む)：俺は俺だ」

白石「迷ってるな」

柳田「迷いはない。あれは、初めて自分で納得できる柳田周の作品になる」

カラオケ屋・厨房

エプロンをした優樹が皿洗いなどして働いている。

同僚の店員「あんた簡単な飲み物とか食べ物作れる？」

優樹「ゼンゼン大丈夫っす。前に居酒屋の厨房やってみましたから」

同僚の店員「(冷凍パックの袋を投げ)じゃこれ頼むわ。冷凍もんだから袋に適当に書いてあるし。飲み物の分量とか作り方はここね、ここに貼ってあるんで」

優樹「了解です。喜んで」

同僚の店員「喜んではいらないから」

優樹「はい」

そこに、厚手のベンチコートなどを着て大きなスポーツバッグを提げた朝雄が入ってくる。バッグからは交通誘導の赤色灯が覗いている。

朝雄「お前あったかいとこでいいよな。俺なんかマジ寒いから。ってか今日片側通行で車止めしてたら缶コーヒーぶつけられ
たし」

同僚の店員を押し退けるようにならずかと優樹に
近寄る。

優樹「どうしたのそれ？」

朝雄の坊主刈りの頭には、さらに異様な剃り込みが入っている。

朝雄「よくね？（同僚店員に振り向き）ってかここ休憩時間とか
ないの？ 買ってきたアイス溶けちゃうし」

同僚の店員「あ、（優樹に目を逸らし）いいよ、5分くらい」

朝雄「5分じゃクソしたら終わっちゃうじゃん」

同僚の店員「（朝雄を見ないようにしながら）20分ぐらい？ さっ

きの俺作つとくし」

朝雄「あざーす」

寒い中に並んで座り込み、甘そうなアイスを食べながら漫才のネタ合わせをしている朝雄と優樹。優樹は手にした紙にときおり目を落としながら。

朝雄は既に暗記しており、紙を見ながらツッコむ優樹とでも絶妙の間合いを作り出す。充分に笑えるが、しかしそれは、かなりブラックな放射能（或いは原発）ネタ。

優樹「いや面白いけどさ、これってヤバくない？」

優樹を見る朝雄。優樹黙る。

弁当が二つ入ったビニール袋を提げたいつかが、店に入っていく。

立ち上がる優樹。

朝雄「もう一個食う？」

優樹「え」

朝雄「コンビニの袋からもう二個アイスを取り出す」寒いからゼンゼン溶けてねえし。つてか中で甘いもん食えなかつたじゃん。俺太っちゃうかも」

同・個室

いつかがひとり、選曲しているところに、飲み物を持った優樹が入ってくる。

優樹「お待たせいたしました。レモンチューハイです」

いつか「…(優樹を見て)あれ、新しいヒト？」

優樹「あ、はい。最近入ったんで」

いつか「なんか、その中途半端な髪形かわいいね」

優樹「(笑って)あざす。他にご注文は？」

いつか「あとで、また」

優樹「承知しました、では失礼します」

いつか「(出て行こうとする優樹に)いくつ?」

優樹「は?」

いつか「いや…いくつ?」

優樹「…失礼します」

笑顔を残して優樹が出て行き、いつかがひとり。

店から出てきた内海が、隅に停められたワゴン車に近づいていくと、助手席の窓を叩き何事か囁く。

助手席のドアが開き、久保田が降りてくる。

同時に後部のドアも開き、金属バットや鉄パイプを手にした十人ほどの若者たちが降り立つ。

その中にいる圭。

久保田を先頭にした一団が入り口に向かっていく。

鍵が開けられ、久保田たち4、5人が、目隠しをした黒いスーツの男を連れて入ってくる。圭もいて。

リングに転がっていた椅子に手早く男を縛りつけていく内海や大島たち。

傍らで見ている圭を振り返る久保田。

久保田「(部屋の鍵を手渡し)お前こいつ見張ってる。絶対にロープほどくんじゃねえぞ。クソシヨンベンもこのままさせる。なんかあったら俺の携帯に電話してこい。俺にかける以外に携帯使うな。余計なところにかけて余計なこと喋るんじゃない。全部片いたら金渡してやるよ。いいな」

圭「…(頷く)」

出て行くこうとする久保田。

男「目隠しはもういいだろ」

譲「うるせえ！」

と、男にとびかかっていこうとするのを大島が抑え、

柳田の家・表

久保田が男Ⅱ金子勲(46)に近づいてその目隠しを外す。

金子「久保田、やっぱりお前バカだな」

久保田「どっちがバカかすぐにわかるよ。金子さん」

久保田、仲間を促し出て行く。

残される圭と、鼻と口から血を滴らせた金子。

桜が自転車で来る。少し入り口の前で家の様子を

窺い、ドアフォンを押す。

ややあつて、扉が開き柳田が現れる。

柳田「…何だ」

桜「まだ答えてもらってません。どうして私の作品壊したんですか」

柳田「二度とここには近づくな」

桜の目の前で扉が閉じられる。

33	<p>同・中</p> <p>去ろうとするが立ち止まり、柳田の家を振り返る。 桜。 大きなスポーツバッグを肩から斜め掛けにした朝雄が通りかかる。小さな機械のようなものを手にして、歩きながらそれをあちらこちらに向けている。</p>
34	<p>同・表</p> <p>柳田の家の脇で、朝雄の手にした機械が音を立てて反応している。 充分にはその機械を使いこなせないらしく、朝雄はそれをちよつと振ってみたり、首をひねりながらディスプレイ</p>

プレイの数字を眺めたりしていて。
その様子を見つめる、桜。

未夢が座って、じつと携帯を見つめている。

ドアチャイムが鳴る。

朝雄の声「俺——」

慌てて携帯をテーブルの下に隠すと立ち上がり、ドアを開ける未夢。

朝雄「(入りながら)4号機どうなってる？」

未夢「は？ ヨンゴーキ？」

朝雄「(リモコンでテレビをつけチャンネルをいじる)4号機だよ4号機。事故った原発の4号機ヤバイじゃん。この時間ニューースってやってないんだっけ(テレビを切る)」

未夢「…」

朝雄「ってかさ、(手にしていた機械を見せ)これ何だか知って

る？」

未夢「あのさ、アタシ、バイトですっごい疲れてて今寝てたところ
んだけど」

朝雄「ガイガーカウンター。事務所にあつたから一瞬借りてき
やつた。で、ヤバいんだよ、そのへんパトロールしてたらさ、そ
の先のあつちのところで、すっげえなんかピーピー言っちゃっ
てさ。マズイよあそこ。今度通報しよ」

未夢「なんであんたがそんなことすんの」

朝雄「いや子どものためには環境よくねえとダメじゃん」

未夢「…」

朝雄「もう一回子ども作んなきゃいけないからさ、お前もあれ
だよ、ヒバクとかするとヤバイじゃん。母体からうつつちゃ
うんだよ」

未夢「…」

朝雄「寝ていいよ。寝ろよ。つてか俺も昼夜両方シフト入れても
らつてんだけどさ。ゼンゼン眠くなんねえんだよな。エッチし
よーか」

未夢「ふざけんなよ」

朝雄「ふざけてねえし。一生懸命働いて金稼ごうとしてるし。って行くわ。仕事」

ドアに向かう朝雄。

しゃがんで安全靴を履く朝雄に、

未夢「…ご飯とか…ちゃんと食べてる？」

朝雄「なんか甘いもんばつか食っちゃうんだよな。コンビニのキャラ
としては俺が肥ったほうがいいかもだよな、あいつがちよっ
とイケメンだから。あ…」

未夢「…なに」

朝雄「電話とか…先生とか警察来たりとかしてね？」

未夢「ないよ。だつて知らないでしょアタシのこと」

朝雄「…そうか」

出て行く。

テーブルの下の携帯が鳴る。

未夢、着信表示を見て一瞬躊躇うが、出る。

未夢「はい」

山口の声「あ、どうも保護司の山口です。いま大丈夫？」

未夢「はい」

山口の声「やっぱりあれかな、朝雄君、そっちには全然来てないか

な？」

未夢「来てないです。前にも言ったけど、あいつが入る前に別れ

たから」

山口の声「でもほら、あなたお子さん生まれたじゃない。やっぱり

朝雄君としては会いたいと思うんだよね」

未夢「関係ないと思いますよ。ムカシから漫才のことしか考えて

なかったし」

山口の声「そうか…ごめんね、またこっちからも電話してみるけど、

なんかあつたらすぐに連絡頂戴ね」

未夢「はい」

電話を切る。その待ち受け画面に現れる、生まれて

間もない赤ん坊の写真。

未夢「…」

36

いつかのアパート

いつかが弁当の入った袋を提げて戻ってくる。

部屋中に並べられた、遥の絵。

いつか、それを片っ端から破っていく。

いつか「…」

テーブルの下に遥がいないのに気づく。

慌てて奥の部屋を覗き、トイレを開ける。

そこにいる遥。

殴る。無言で遥を殴るいつか。

キッチンの蛇口から、ゆっくりとしたリズムで洩れ滴る水滴。

37

ボクシングジム

椅子に縛り付けられたままの金子から離れて圭が床に座り、カップラーメンを啜っている。

金子「顔の血、拭いてくれよ。痒くてしょうがねえんだ」

圭、立ち上がり、キッチンの水道でタオルを濡らす。

金子「冷たいじゃんかよ、そのままじゃ。さっきお前、湯沸かしたろ。頼むよ。ついでに温かいもん。日本茶ねえか」

圭、棚を見るがお茶はない。

金子「なきや白湯でいいや」

圭、その辺りにあった紙コップに薬缶から白湯を注ぎ、お湯で濡らしたタオルを絞って金子に近づく。

金子「先に飲ましてくれ」

コップを金子の口元に持っていく圭。ごくごくと音を立てて金子が白湯を飲む。

金子「…お前、この辺じゃ見ねえよな」

圭「黙ってるよ」

紙コップを床に置き、タオルで金子の口元を拭いていく圭。

金子「黙ってる？ 黙ってるってお前、誰に向かってもの言ってるかわかってんのか」

圭「縛られて動けねえただのオッサン」

金子「(笑って)うまいね。だよな。：痛えよ」

金子の口元にこびり付いた血を丁寧に取っている圭。

金子「最近年少から逃げた奴らがいたってひよつとしてお前ら？」

拭き終えて金子から離れる圭、水道でタオルを洗う。

金子「俺らのところにはそういう情報全部入ってくんだよ」

圭は金子に背を向け床に横になると、携帯で電話をかけ始める。

金子「あんなアタマの悪いガキのどこいねえでウチ来いよ。な」

何度も繰り返す、発信履歴を押しては同じ番号にかける圭。

金子「それさ、お前昼間っからずーっと同じところに電話してんだろ。指の動きでわかるんだよ。誰だよ」

答えずに目を瞑る圭。

金子「…余計なところに電話してるとあのバカに怒られんぞ」

圭「姉ちゃん」

金子「…姉ちゃん」

圭、床に丸めてあった毛布にくるまり、固く身を縮める。

キッチンの蛇口から、ゆっくりとしたリズムで水が滴つていて。

いつかのアパート(朝)

キッチンのテーブルに上体を投げたまま、目を開けているいつか。服は昨夜のまま。

テーブルの下で丸くなって眠っている遙。

いつかの眼は、自分が破り捨てた遙の絵に向けられていて。

立ち上がるいつか、それらを拾い集め始める。

それをゴミ袋にまとめて突っ込むと、眠っている遙を

起こし、椅子をキッチンシンクのところまで持ってきてその上に立たせ、水道を勢いよく出して歯を磨いてやる。裏側まで丁寧に、時間をかけて…。

いつかが休憩している。ぼおつと何かを考えていて。

佐々木がエプロンを外しながら来て、

佐々木「交代、いい？」

いつか「あ、すみませんでした」

中に入ろうと、

佐々木「大丈夫？」

いつか「え？」

佐々木「いや、なんか…」

いつか「…子ども学校に入れるって、やっぱり住民票とか戸籍謄本とかそういうの全部いるんですよね」

佐々木「…小学校は義務教育だからさ、住んでるとこの役所か

らだいたい通知が来て…」

いつか「障害とかあるとやっぱり難しいですよね」

佐々木「…あの子って生まれたときから…」

いつか「あの日から急に聞こえなくなったみたいで…」

佐々木「あの日？」

いつか「いや…(中に入りかけて留まり)店長、お金貸してもらえませんか？」

佐々木「いいけど…(笑いを浮かべ)あまりたくさんは…」

いつか「いくらなら大丈夫です？」

佐々木「あの子…ひよつとして逃げてきたとか？ いやほら旦那の

DVとか借金とか…そういうのから、なんか…」

いつか「逃げてやり直そうとか思っちゃいけませんか？ 逃げてゼ

ンゼン別の人になりたいとか思っちゃいけませんか？」

佐々木「いや、いけなくは…」

いつか「妊娠したんだけど、つて言ったらどうする？ この間だって

中出ししたじゃん」

佐々木「あ、いやそれは君が…」

いつか「いくら出してくれる?」

佐々木「あ…いや…(笑いが強張って)」

店の方から「すみませーん」と客の声。

いつか「はい、すみません今うかがいます!…(佐々木に)嘘です
から。全部」

中に入る。

圭が、バケツを尿瓶替わりにして、縛り付けたままの
金子の小便を取ってやっている。音を立ててバケツの
中に注がれる小便。

金子「お前さ、祖父ちゃんの介護とかやったことあんじゃないの」

圭「(金子のズボンのジツパーを上げながら)身内はいないから」

金子「姉ちゃんがいるだろ」

圭、バケツを持って離れる。

金子「どこにいんだよ」

圭 「津波で行方不明」

金子 「津波とか知らねえよばかやろう、半分くらい日本人死んじまったほうがすつきりすんだろ」

バケツの中身をトイレに流す圭。

金子 「…生きてたらいいな」

圭 「…」

ガスコンロにかけていた薬缶が音を立てる。

金子 「姉ちゃん何してたの？」

圭 「(2つの紙コップに白湯を注ぎながら)結婚して、子どもが

一人」

金子 「いくつ？」

圭 「四つ…五つかな」

金子 「ばか、姉ちゃんだよ」

圭が、紙コップを持って金子の傍らに近づく。

圭 「…二十一」

金子 「若っ…」

圭 「施設出てすぐ結婚した」

金子「ちよつと、手だけほどこいてくれ。自分で飲むよ。施設って孤

児院か。姉弟二人きりなのか」

圭頷き、金子の手を縛っているロープを解いていく。

金子「養護施設育ちなんか珍しくもなんともねえぞ。俺んどこ来てみ、そういうヤツばつかなんだから。お、すまん」

解放された手で圭から紙コップを受け取り、白湯を飲む。

金子「あぢつ」

と、コップを取り落として口を押さえる。

圭が慌ててタオルを取りに走り、金子の口元に当てようと…その瞬間金子の手が伸びて圭の頭を押さえつけ、頭突きが入る。立て続けに。鈍く固い音が響き圭が倒れ込む。

それを見降ろしながら足を縛ったロープを手早く解く金子。一瞬身体をほぐすと、呻いている圭のポケットから携帯を取り出し、番号を押しながらドアへ向かう。

金子「俺だ…今から戻るからよ…え？…だから今から戻るつってんだよこのタコ！…」

ドアの鍵が外から開けられ、久保田の仲間が数人雪崩れ込んできて金子に掴みかかる。纏れ合って倒れ込む金子に蹴りが入る。頭を抱え腹を折る金子を引きずるように椅子のところまで連れてくると再びそこに縛り付ける男たち。

譲が圭の頭を掴んで顔を上げさせる。

久保田「絶対に逃がすなって言ったよな」

呻く圭。

大島が携帯を拾い上げ、通話を切る。

大島「その発信履歴を見て）お前、これ、どこに電話してんだ」

と、久保田に手渡す。

圭「…」

金子「(血塗れの顔で笑って)姉ちゃんだよ」

圭「…」

金子「(プツと噴き出し)こいつら姉弟でオマンコしててよ。そんで

百回も二百回も電話してよ。姉ちゃん、姉ちゃん、つて泣きながらセンズリ搔いてたよ」

一同の眼が圭に注がれ、金子の笑いが昂まる。

金子に掴みかかろうとする圭を譲が突き飛ばす。

久保田「(圭に)立て」

圭「…」

久保田「立て！」

よろよろと立ちあがる圭。

久保田「こいつと一緒に前も殺すぞ」

圭「…殺してみろよ」

久保田「…」

金子の痙攣的な笑いが昂まつて。

いつかが、古い傷だらけのほうの携帯に保存してある伝言メッセージを開く。男の声流れ始める。…「あ、

俺です…」…躊躇っているような、不安を押し殺して泣きながら笑っているような…それはいつかの夫…各務泰志(42)の声…「大丈夫かな…どこにいるんだろうね…あの…やっぱり諦めきれないんだよね…絶対君と、遙が、どこかに生きてるって思ってたよね…こうやつて携帯も繋がるしさ…やっぱり…毎日毎日…」…切れる。次のメッセージを開く…「俺です…また電話しちゃいました…今日やつと兄貴の店の片づけが目途ついてさ…再開したら俺もここで働くことになってんだけど…それはまだちよつと先だよね…遙…元気かな…病気とか…」…切れる。煙草に火をつけ次のメッセージを開く…。

優樹「(ドアを開け)失礼しまーす」

急いで携帯を切るいつか。

優樹「ウーロンハイと、ポテトフライお待たせしました」

いつか「(笑顔で)どうも」

優樹「いつもお一人なんですな」

いつか「…」

優樹「あ、すみません。他に…」

いつか「あんたも飲まない？」

優樹「いや、ちよつと」

いつか「だよね。冗談」

優樹「…(出て行くこうとして)俺、漫才やってて」

いつか「あ…そうなんだ」

優樹「一瞬聞いてもらっていいですか」

いつか「聞かせて聞かせて」

優樹「ホントはコンビなんで一人でやっても面白くもなんともない

かもですけど…えー…じゃいきます…」

外の方で「いらつしやいませー！」という大きな声が聞

こえる。

優樹「あ、すみません、ちよつとお客さん来ちやつたみたいなんで。

また時間のあるときに」

いつか「うん」

優樹「また、絶対」

いつか「OK、絶対」

優樹が出て行く。ひとり残る、いつか。

42

柳田の家・表

ピーピーと反応しているガイガーカウンターを手に、
携帯をかけている朝雄がいる。

朝雄「つてかだからなんでちゃんと調べに来ないわけ？ 意味わ

かんないんだけど。こうやってピーピーピーピー鳴ってんじ
やん…だから俺が誰だつていいじゃん、なんで…わかったか
ら聞いたからそれはもう…無視かよ、もういいよ！」

乱暴に切った携帯を地面に叩きつけると、立ち去
る。

別の一角で、じっとそれを見ていた桜。

43

未夢のアパート・表・中

未夢が仕事から帰ってくる、と、ドアのところで朝雄が待っている。

朝雄「携帯壊しちゃった。お前の貸してくんね」

未夢「(ドアの鍵を開けながら)…」

朝雄「つてそれマズいよなやっぱ。お前のなくなっちゃうじゃん」

未夢「うん」

朝雄「(先に中に入りながら)あの家に火つけちゃおうかな」

未夢「…」

朝雄「いや、火とかけると警察とかみんな来るじゃん。あの家
なくなんじゃん」

未夢「(じつと朝雄を見つめ)…なんの話？」

朝雄「エッチする？」

未夢「…いいけど」

朝雄「希望的には女の子だったんだけど男でもいいや」

未夢「だよね」

朝雄「仕事行くわ」

未夢「…うん」

ドアに行きかけて立ち止まり、ポケットからクシヤクシヤになった7、8枚の千円札を取り出し、5枚を未夢に差し出す。

未夢「…ありがとう」

朝雄「つてかちよつとずつだけどそれ貯めといてくんね」

未夢「…うん」

朝雄「子どものためによ。なんつーの、積み立て？（笑う）」

未夢「子どもできたらちゃんといい大学とか行かせようね。私たちみたいなバカじゃダメだから」

食べようと手にしていたミカンをひとつ、朝雄のポケットに突っ込む。

朝雄「つてか俺バカじゃないし」

出て行く。

いつもとは違う大人っぽい格好をした桜が入ってくる

と、真っ直ぐに柳田と白石の座っているブースに歩み寄る。

桜 「いいですか、座っても」

白石「…(桜と柳田を見比べ)」

桜 「(白石に)初めまして。柳田先生に美術を教わっている学生で村上桜と言います」

白石「(微笑み)柳田の友人の白石です。どうぞ」

座る桜。

柳田が立ち上がりそのまま立ち去ろうとするのに、

桜 「(静かな声で)先生のお宅の裏でガイガーカウンターが反応しています」

立ち止まる柳田、白石と目を合わせる。

桜 「先生は何をやってらっしゃるんですか？ 先生の作品と、ガイガーカウンターと、先生の最近のご様子にどんな関係があるんですか？」

柳田、去る。

桜 「…」

白石「僕は放射能の専門家ですわね」

桜「(白石を見る)…」

白石「ガラス固化体ってご存知ですか」

桜「いえ」

白石「放射性廃棄物を貯蔵するためにガラスと一緒に溶かして封じ込めておく。でも僕に言わせればまだまだ不完全でね、それ自体がやはり強烈な放射線を発している。僕たちの研究所では全く新しい技術を開発した。『完全』になり近づいた。しかし、どこからも認められない。(笑って)いわゆる原子カムラから疎外された人間なんでね」

桜「…」

白石「僕はそれとウランをさらに結合させて新しい物質を作りました。(人差し指と親指で小さな丸を作って)このくらいの小さなものだけど、水と反応すると核分裂を起こして臨界状態になる。わかりますか。この間の原発事故など比較にならない状況を惹き起こすことになる。彼のオブリエには、その、僕が渡した小さな爆弾が組み込まれて

います」

桜「…」

白石「彼はこれまでもずっと、世界と、闘い続けてきたんだと思います。柳田周は、それを最後まで全うしようとしている。

…さっきのあなたの問いへの答になりましたか」

桜「でも…それって…」

白石「平気で爆弾を落とせるヤツは人間じゃない。でもね、ではひとりの人間が、その人間らしく生きるというのはどういうことなのでしょう？ これは僕からあなたへの質問です」

桜「…」

白石「柳田はもう死にます。おそらく、個展の前に」

4
5

柳田の家・表

桜が来ると、ドアフォンを押す。

柳田が現れ扉が開かれる。強引に中に入っていく桜。

作品が並べられたアトリエ空間。

桜 「ガラス固化体の作品ってどこですか？」

柳 田「…(奥のドアを示す)」

奥の作業場が続くそのドアに、『OVER THE RA
INBOW』と大きく描かれてある。

桜 「虹の向うに何があるんですか？」

柳 田「…」

桜 「何も…ないんだよ！」

いきなり傍らにあった金属製の棒を掴むと、次々に
その場にある作品を叩き壊し始める。

碎け散っていく作品たち。

桜 「私は何をすればいいんだよ！ どう生きればいいんだよ！
わかんないんだよ！ 淋しいんだよ！ 愛なんかはない…愛
なんかどこにもない…みんな自分のことばかり考えて…愛

なんかどこにもない！」

泣きながら、柳田の作品を粉々にしていく桜。

桜 「苦しい…憎い…嫌い…いやなんだよ全部…全部嫌…」

じつと桜を見つめている柳田に、笑みが浮かぶ。

そのまま奥へと続くドアに向かい、開け放つ桜。

そこにあるオブジェ。

金属棒を振りかぶる桜。

柳田「世界を終わらせよう」

桜 「…」

桜の腕が震えている。

柳田「愛は最後にやってくる。愛が蘇るのは、ほかの人間らしい

気持ちかすべて戻ってからのことだ。愛は…最後に蘇るん

だ」

嗚咽する…嗚咽が止まらない、桜。

敷地内の一角。新聞紙などを丸めて置いたところに、朝雄がライターで火をつけようとしている。ライターの具合が悪いようでなかなか火がつかない。傍らでピーピーと鳴っているガイガーカウンター。火がつく。

朝雄「…(笑う)」

金属棒を持って走ってきた桜が、飛び掛かるようにして朝雄を殴りつける。

身体を丸める朝雄。さらに殴りつける桜。転がるように走って逃げる朝雄。

桜はそのままガイガーカウンターまで叩き壊し、上着を脱いで火を消し止める。

傍らに柳田が立っていて…。

朝雄が走ってくると、未夢の部屋のチャイムを鳴ら

す。ドアノブを引っ張る。ドアを叩く。

朝雄「引っ越すぞ！ 明日引っ越すぞ！ おい！ 明日引っ越すから！」

コンビニ袋を抱えて帰ってきたらしいアパートの住人が声をかける。

住人「あの…さつき、引越し屋来てましたけど」

振り返る朝雄。頭から血を流し、しゃくりあげるように泣いている。

遙を抱きかかえて医師の前に座っているいつか。

医師「いや…やっぱりこれは大きな病院に行つてちゃんと診てもらったほうがいいと思うんですね。聴こえなくなるというのはいろんな要素があるわけで。ウチじゃあちよつとこれ以上お母さんの質問にはね、お答えできないというかいつか…：そうですか」

医師「というかこれ…最近いろんなところからうるさく言われているんであれなんですけど…お子さんちよつと身体に痣が多いというか、ね…」

いつか「笑って」この子やっぱり耳が悪いんで私が注意しても聞かえなくてしよつちゆういろんなとこにぶつかっちゃうんですよお」

診察料を払っているいつか。

事務員「今日は保険証お忘れだったので、申し訳ないですけどこの金額になっちゃうんです(請求書を示す)」

いつか「あ、はい(財布を出して)」

診察室から医師が顔を出しこちらを覗く。

いつか「(そちらを気にしながら、抱きかかえた遙に)これからおいしいもの食べに行こうねー」

いつかと遥がいて。

優樹「(ドアを開けて)お待たせしましたー。レモンチューハイとピ

ラフとポテトフライです」

オーダーを並べる。

優樹「(笑って)お子さん、っすか」

いつか「なんだ子持ちのお婆ちゃんかよ、つて顔した」

優樹「そんなことないっす」

いつか「した」

優樹「他になんか…」

いつか「セックスする？」

優樹「…は」

いつか「エッチしようか」

優樹「…(遥に目をやる)」

いつか「大丈夫この子耳聴こえないから」

優樹「…」

優樹、遙の前にしゃがみ込むと、その目の前であやすように手を振ったりする。

いつか「（そんな優樹を見て）私は…」

優樹の笑顔を見ても笑い返すこともなく、黙ってピラフを食べている遙。

優樹「…（表情が少し曇る）」

いつか「…私はいつも物欲しげなオッサンとしかエッチできないのか

よー！」

優樹立ち上がり、小さく会釈をして出て行く。

いつか「…」

ピラフを食べている遙。

いつか「…聴こえてんでしょ…あんだ、ホントは全部聴こえてんでし

よ…」

ゆっくりといつかの手が伸び…ピラフを食べる遙の髪に触れそうになつて…そこで止まる…。

いつか「…」

52	ボクシングジム
53	<p>蛇口から洩れ滴っている水滴。</p> <p>キッチンに凭れて座り込んでいる圭。</p> <p>椅子に縛られたまま鼾をかいて眠っている金子。</p> <p>圭の指が何度も何度も携帯の発信ボタンを押す。</p>
	<p>柳田の家</p> <p>奥の作業場。</p> <p>防護服に身を包み作業をしている柳田と桜。桜が優秀な助手のように、柳田の手に道具を渡して。ほぼ完成したオブジェに、慎重な手つきで「起動スイッチ」を取り付けていく柳田。それを見つめる桜。</p> <p>柳田の額の汗。桜の額の汗。作品に触れる柳田の指先。作品を見つめる桜の眼差し。二人の、息遣い。</p>

働いている優樹のところに朝雄が来る。

朝雄「同僚の店員を押し退けて近づき）あいつの実家行った」

優樹「え」

朝雄「あいつ実家に帰ってて」

優樹「…」

朝雄「やっぱ子ども生まれてた。なんかジジイが入るなとか言うから殴り倒して無理やり入ったら奥の部屋であいつが泣き喚いててき。たらババアが出てきて警察に電話しようとかするからババアもボコボコにして奥に行ったんだ。したら何だと思う？」

朝雄の手に血がこびりついていて。

優樹「…」

朝雄「あいつが包丁とか持ってガキ抱いててき、近づいたらこの子殺してアタシも死ぬとかって（笑って）やっぱバカじゃん、あいつ。ガキ殺したらヤバイだろっの。捕まっちゃうし、あ

「さ」

優樹「…で？」

朝雄「帰ってきた。5千円置いて。積み立ててんだ、将来のために。あ、つてか結局女か男か聞きそびれちゃった」

と、優樹が作っていたオーダーのポテトを食べる。

傍らの店員がポテトの皿を避けようとする。いきなりその店員の顔を激しく殴りつける朝雄…そして、床に落ちたポテトを口にする。

優樹「…」

55

同・個室

いつかが選曲している。

その脇のソファで横になって眠っている遙。

ドアが開き、酒のボトルを手にした優樹が顔を出して笑う。

いつか「…」

優樹の後ろに、掌にポテトを抱えた朝雄がいる。

56

ボクシングジム

キッチンに座っている圭。

金子「…シヨンベン」

圭は顔も上げない。

金子「だよな」

ズボンの中にそのまま放尿する金子。

金子「…姉ちゃんとの一番いい思い出聞かせてくれよ」

圭「…(顔を上げる)」

金子「なんかあんだろ」

圭「…」

金子「なかつたら一番悪い思い出でもいいや…っーか、なんかないのか、こう、語りたくなるような思い出」

言葉が出てこない圭。

金子「…じゃ作れ、これから。俺が作らせてやるよ」

圭「…」

金子「マジな話しようか。…これ、長引いてんだろ。ホントは俺攫ったら半日でカタがつく話なんだよ。それがこんなに長引いてるってことはやっぱりあのバカたちの思うようにはぜんぜんなつてないっつーことだよ」

圭「…(金子を見る)」

金子「逆にもうあいつら殺されてるかもしんねえぞ。で、この場所がわかんなくて俺とお前だけ、なんか貧乏くじ引いてる、みたいな」

圭「…」

金子「もうやめようぜ、ばかばかしい。財布は抜かれたけど上着の内ポケットに十万入ってる。これやるよ。足んなきや後で渡してやる。携帯貸せ」

圭「…」

金子「お前も早く姉ちゃん捜したいんだろ」

圭、立ち上がり金子に近づくと、上着の内ポケットに手を突っ込んで十万を取り出す。

圭「…」

金子の後ろに回り、ロープを解いていく圭。

金子「笑って）やっぱお前バカじゃねえな」

その瞬間、解いたロープを金子の首に巻きつけ締め上げていく圭…金子が抵抗する…そのまま後ろに倒れ込む…さらに締め上げる圭…金子の力が抜ける…圭が詰めていた息を大きく吐き出す…。

圭「…痛っ」

金子が圭の手首に噛みついた…身体を振ってそれを振りほどき立ち上がる圭。

金子「お前はもう死んだ…（笑いだす）」

圭「…」

金子「HIVって知ってるか。俺、そうなんだよ。もうお前もな」

圭、金子に馬乗りになると一気にその首を両手で絞めていく。

金子が動かなくなる。

圭、急いでキッチンの水道をひねって手首を洗う。迸

る水とともに、血が流れていく。

いつかと朝雄が飲んでいる。

優樹の腕の中で眠っている遙。

かなり酔った様子のいつか。グラスを片手に、

いつか「(うわ言のように)何台も…何十台もの車が流されていく

…車だけじゃない…家も…人も…ぐるぐるぐるぐる回っ

たりしながら…流されてく…何も聞こえない…何も縋る

ものがない…私もぐるぐる回ってる…」

いつかの胸元に酒がこぼれる。

グラスを呷りながらじつといつかを見ている朝雄。

静かに、遙を抱いて優樹が部屋を出て行く。

いつか「(酒を含みながら)水を飲んだ…なんだかわからないものを

いっぱい飲み込んだ…息ができなくて…鼻の奥が痛くて痛

くてたまらなくて…目の前でこう、へんな格好でくるくる

人が回っていて…気がついたら病院で…でもそこでみんなが騒いでて…火事だつて走り回ってて…私は走ってて…ぼんやり立ってる人がいて…私は走ってて…なんで走ってるんだろつて思いながら走ってて…そしたらそこになんか濡れになった遙がいて…遙を抱きしめて…かかえて…また走って…走って…大きな虹が出てて…嘘みたいな虹が見えてて…逃げた…どこでもいいから逃げて…ふたりで…消えてなくなろうと思つて…」

さらに酒を飲もうとしてグラスを呷り…

いつか「…空だよ」

その瞬間、朝雄がいつかに襲い掛かる…抵抗するいつかを押さえつけ、服を引き裂き、足を広げ…凌辱していく。

優樹が、眠ってる遙を抱いたまま座っている。

離れて、鼻にティッシュを詰めた同僚の店員がじつと立っている。

『OVER THE RAINBOW』と描かれたドアが開き、防護服を脱ぎ捨てた柳田と桜が完成した作品を抱えて出てくる。

そこに置いてあったキャリーバッグにそれを丁寧に収納する二人。そのまま倒れ込むように簡易ベッドに横たわる桜、すぐに寝息を立て始める。

疲労を滲ませ、咳き込みながら、湯沸しポットを手に水道に向かう柳田。

桜のポケットの携帯が鳴る。目を閉じたまま桜がそれを取出し、そのまま切る。

柳田「…」

桜「…明日…っていつか今日、私の誕生日なんだ」

柳田「友達からメールでも入ったんじゃないのか」

桜「忘れないように自分でお知らせスケジュールをセットして
た」

柳田「…」

ポットに水を注ぐ柳田、再び咳き込む。

桜「(目を閉じたまま)先生」

柳田「…」

桜「死なないでください」

雨の音。

柳田「誕生日おめでとう」

桜「…」

柳田「家族がいなかったから…それ以上どんなことを言ったらいい
のか、わからない」

いつかのアパート

雨の降っている音。

鍵が開けられ、遙の手を引いたいつかが戻ってくる。頭からずぶ濡れ。羽織った薄手のコートの下は、引き裂かれた服が絡みついでいて。

テーブルの下に潜り込んだ遙が、絵を描き始める。父親であろう男の、或いは家族三人の、絵。

いつか「…」

バッグもコートも投げつけて遙を殴る。殴る。泣きながら殴るいつか…。

軽快な音楽が鳴る。

投げた拍子に口の開いたバッグから飛び出した古い傷だらけの携帯が鳴っている。

割れたディスプレイに、同じ番号の着信履歴が並んで点滅していて。

いつか「…」

蛇口から、ゆっくりと洩れ滴っている水滴。

漫才のネタを合わせながら出てくる朝雄と優樹。

優樹「…」

通りの向うから、保護司の山口や制服の警官が向かって来る。山口が警官たちに朝雄を指し示す。

優樹「朝雄クン」

朝雄「ん、ってそこはツツコミどこじゃないだろ」

優樹「逃げろ」

と、朝雄を反対の方に押し飛ばし、自分は警官たちのほうに向かっていく。

駆け寄ってくる警官たちから朝雄を守るように両手を広げる優樹。

優樹「朝雄逃げろ！」

朝雄、我に返ったように逃げ始める。

優樹を投げ飛ばす警官、そのまま道路に頭を押し付ける。

残りの警官が朝雄を追いかける。すぐに捕まる朝雄。抑えつけられるが暴れ…

朝雄「ダメなんだって…俺にはガキがいんだって…ガキには親父が必要なんだよ…一人で育てんだよ…二人で育てなきゃダメなんだよ…積み立てだって始めたし…ジャマすんなよ！」
振り切って道路に飛び出す朝雄。

優樹「朝雄お…！」

朝雄が誰かと纏れ合って、倒れる。

優樹「…」

足もとに転がった朝雄を見たまま立ち尽くしている、包丁を握りしめた未夢…激しく嘔吐する。
ミカンがひとつ、朝雄のポケットからこぼれ落ちる。

大釜で米を洗っているいつか。客の気配に振り返る。
いつか「いらっしやいませ…！」

そこに立っているのは、泰志。

泰志「久しぶり」

いつか「…あ…」

泰志「きつと生きてると思ってた。きつと会えると思ってた」

動けない、いつか。

泰志「遥、ずいぶん痩せたね。って言うか、臭かったから着替え

させたら身体中痣だらけだった」

いつか「…」

泰志「大丈夫。やり直そう。大丈夫だよ。みんなで帰ろう」

いつか「…」

いつか、泰志から後退り、そのままの格好で店を飛び出す。

走るいつか。

64	<p>別の道</p> <p>彷徨うように歩く圭。 携帯の発信を繰り返す。 その手首に巻かれた汚れたハンカチ。</p>
65	<p>いつかのアパート</p> <p>いつかが鍵を開けて飛び込んでくると遥の姿を探 す。</p> <p>いつか「遥…遥！」 遥はいない。</p>
66	<p>柳田の家</p> <p>電話が鳴っている。 簡易ベッドで目覚める桜。</p>

留守番電話が応答し、相手の声が聞こえる。

相手の声「トランス・ギャラリーの佐藤でございます。あの…先生、作品の搬入は今日の予定なんですが…えー、誠に恐れ入ります、お待ちしておりますので一度ご連絡頂けますでしょうか…」

柳田の姿も、キャリーバッグもない。

桜「…」

67

遙を探しながらいつかが走る

68

バス・車内

バス停で圭を乗せ、走り出す。

立つ圭のすぐ後ろの座席に、キャリーバッグを抱え目を閉じた柳田が座っている。

69	柳田を探して桜が走る
70	バス・車内 坂を自転車で駆け下りていく桜。
71	遥を探して走るいつか 通りの方岸に遥が歩いているのに気づく。

74	バス・車内
	<p>いつか「遥！」</p> <p>遥がいつかに向かって笑い、道路に飛び出す。</p> <p>いつか「遥！」</p> <p>いつか「…」</p> <p>遥が振り返って、いつかを見る。</p> <p>いつか「遥！」</p> <p>いつかが叫ぶ。</p>
73	通り
	<p>圭 「…この人…死んじゃうよ…」</p> <p>走り続けるバス。</p> <p>柳田を抱きかかえている圭。</p>
72	バス・車内

75	<p>力いっぱいペダルを漕いでいた桜が、止まる</p>
76	<p>通り</p>
77	<p>バス・車内</p>

圭が叫ぶ。

圭 「止めてよ！ この人死んじゃうよ！」

バスが激しくクラクションを鳴らし急停止する。

バランスを崩し柳田に覆いかぶさるように転ぶ圭。

停止したバスの直前の路上に、バスから守るように遙を抱いたいつか。震えながら、遙を力一杯抱き締め
ていて。

柳田が息絶えている。

圭が立ち上がり、ふらふらと扉のほうに行く。

圭 「降ろして…もらえませんか」

後部扉が開き、降りていく圭。

入れ替わりのように、桜が、乗ってくる。

椅子に座った遥が、テーブルで絵を描いている。

いつかはその傍らで煙草を喫いながら泰志にメールを打っていて…『さつきはごめんなさい。突然だったのでパニックっちゃいました。もうちよつとでアパートに戻るので迎えに来てもらえますか。遥と一緒に待ってます』
…メールを送信し終えると煙草を消し、キッチンにくつか転がっていた空のペットボトルにストーブ用の灯油を詰め始める。

携帯が鳴る。それを取って、着いたメールを開く。

いつか「…(遥を見て微笑み)遥、お父さんが迎えに来るから、ひとりで待ってられるよね」

いつかが大きなバッグを脇に置いて選曲している。

扉を開けて若い店員が入ってくる。

店員「レモンチューハイとポテトフライお待たせしましたー」

いつか「…(笑顔で)ありがとうございます」

店員「失礼します。…あ、えーっとなんか他の…」

いつか「もういいよ」

店員「失礼しましたー」

出て行く。

バッグを開け、さきほどのペットボトルを取り出ししてい

くいつか。

ポケットの中の、古い傷だらけの携帯が鳴る。

いつか「…」

取り出して、出る。

いつか「…圭ちゃん」

80	<p>街の片隅</p>
81	<p>カラオケ屋・個室</p> <p>圭が携帯を耳に当てている。</p> <p>圭「…」</p>
82	<p>街の片隅</p> <p>いつかが微笑んでいる。</p> <p>いつか「いつも電話くれてたんだよね。ごめんね、出なくて」</p> <p>圭が泣いている。</p> <p>圭「姉ちゃん…会いたい…」</p>

83	カラオケ屋・個室
84	<p>いつか「会おうね…ごめんね今まで…会おうね」</p> <p>街の片隅</p>
85	<p>圭 「いつ会える？」</p> <p>カラオケ屋・個室</p>
86	<p>いつか「明日会おう」</p> <p>街の片隅</p> <p>圭 「どこで会おう？」</p>

87	カラオケ屋・個室
88	いつか「駅で会おう。中央駅」
89	街の片隅
90	いつか「どこに行こうか」
87	カラオケ屋・個室
88	いつか「駅で会おう。中央駅」
89	街の片隅
90	いつか「どこに行こうか」

91	カラオケ屋・個室
92	<p>いつか「どこか遠くに行こう。二人で」</p> <p>街の片隅</p>
93	<p>圭「どっか遠くだね。二人で行くんだね」</p> <p>カラオケ屋・個室</p>
94	<p>いつか「明日行くんだよ」</p> <p>街の片隅</p>
	<p>圭「明日だね」</p>

95

カラオケ屋・個室

いつか「…明日、今度は姉ちゃんから電話するからね…うん、じゃ

あ…明日…」

電話を切る。カラオケの曲をセットする。ペットボトルの灯油を部屋中に撒く。イントロが始まる。ライターで火を放つ。マイクを持つ。

96

駅・構内

柳田のキャリーバッグを引いて桜が駅に入ってくる。

手首に真っ白な包帯を巻いた圭が、駅に入ってくる。

桜のキャリーバッグに足を引っかけてしまう圭。

キャリーバッグの中で小さくカチという音がする。

桜 「…(圭を見る)」

圭 「すみません」

キャリーバッグの中から、小さく、水が滴る音が聞こ

97	<p>カラオケ屋・個室</p> <p>圭 「(周りを見回す)∴明日∴」</p> <p>桜、再び歩き出すと、改札口に入っていく。 水が、滴る音。ゆっくりとしたリズムで。</p>
98	<p>大きな嘘のような虹が、続く線路の彼方に架かっ ていて</p> <p>イントロが続いている。 炎に包まれた中でいつかが、歌い出す。</p>

※引用
ヴァルラーム・シャラーモフ シリーズ『左岸』より「センチメンツィア」

(了)